
時空切取り師マト

Asakkyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空切取り師マト

【Nコード】

N7605Y

【作者名】

Asakkyo

【あらすじ】

魔術が義務教育の一部として使われ始めて数十年後。魔術師の子ども二人が、スーパールの横で捨てられる。一人は男の子、もう一人は女の子。二人はすぐに魔術学校の校長に保護され、数年後に学生寮に入れられる。魔鬼はカリスマ時空切取り師になり、寿巳玲は己がかつて恐れられていた伝説の女神の生まれ変わりだと知る。ある日の夜、高校生になった寿巳玲は、悪の組織に己の魂を抜き取られる。翌朝、待ち合わせの時間に寿巳玲が降りてこないことを不審に思った魔鬼は、妹の部屋へ行く。そこで、妹が何者かに襲われたこ

とを知る

。

プロローグ

雨が降っていた。

傘も差さず、合羽も着ずに街中を歩く、年若い女性。胸には白いバスタオルに包まれたまだ生まれて間もない赤ん坊が抱えられている。スーパーの前まで来ると、女性はゆつくりと、静かにその場に屈みこみ、持っていた新聞紙2部を地面の上に置き、その上に赤ん坊をおく。

「ごめんね、魔^ま鬼。あんたとあんたの妹の寿^{すみれ}巳^み玲^れのこと、お父さんとお母さんは誰よりも愛してる。どうか、元気でいてちょうだいね……。」
涙を流しながらそう言い残すと、魔鬼という名の子ども母親らしき女性は去って行った。

翌日。

曇り空の下で、昨日捨てられたばかりの赤子のもとに、年若い男性が来た。彼の腕の中には、一人の赤ん坊があった。

「ごめんな、寿巳花……。悪いのは全てお父さんのせいなんだ。……本当にごめん」

彼もまた、魔鬼の隣に新聞紙2部を地面に置き、その上に赤子をおいた。

おいてすぐ、魔鬼の方に視線が向く。

「魔鬼、お前も本当にごめんな。父さんと母さんな、お前と寿巳玲のこと、大好きだぞ」

彼も昨日の女性と同じように、感情のままに泣くと、その場を去っていった。

あれはまだ、魔兎が生後一歳と数ヶ月、寿巳玲が生後三ヶ月目のことだった。

第1話

2011年 4月9日 花魔術の日

「では、出欠をとります!!」

柔らかな日差しが校舎内に流れる。

「神田さん!」「はい!」「佐藤くん」「はい!」

クラス替えが終わり、教師が出欠確認をしている。

「……あれ? 誰か、魔兎くんを知らないか?」

不思議そうな顔をする担任に、僕のクラスメイトが答える。

「どーせ、サボリでしょ。いいから、続けてくださいセンセ!」

……呆れ顔で言うなよな。

まあ、当の本人が窓の外から除いてることなんか、知らないだろうな君らは。

木の上でぼんやりと、自分のクラスの教室を眺めると、僕は木からスルリと下りて、寮に逃げ出す。

背後で、担任がこんなことを言うのを聞いた。

「まあ、あいつは成績優秀だから、サボっても免除になるし、どうでもいいか」

……否、どうでもいいは言っちゃだめだよ先生。

危うくコケるところだった。

しばらく校舎の傍を誰にも見つからないように身を小さくしながら歩く。すると、森が見えてくる。森の真ん中を走る一本の道を頼りに歩くと、僕ら学生の為の寮がある。

「ふう……。疲れた」

所要時間、およそ10分。ただでさえ体力が無い僕にとってこの10分は、受験勉強を一時間やるよりもつらく感じた。

寮の中に入っすぐの扉を開ければ、そこが僕の部屋。

「ただいまー」

スローモーションで靴を脱ぎ、ドタドタと足音を立てながら洗面所に向かう。

自分の身なりをチェックする。

「うん。今日もイケメン！良いぞ、カッコ良いぞ僕」

と、こんなことをつい言ってしまったが、決して、僕はナルシストなんかではない。

折角、鏡の前に立ったんだ。鏡に映る自分を他人だと思い込んで、自己紹介の練習をしよう。

僕は、魔^ま鬼。生まれてすぐに、両親に捨てられ、その後、今通ってる私立時空魔術高等学院の学院長に救われて、今がある。生い立ちはこの辺にしよう（こんなこと話したって、悲しくなるだけだし、僕だけでなく、この話を聴く誰かもきつと悲しむだろうし）。えーと。あ。そうそう。僕は、昼間はこうして高校三年生やってるけど、夜はまた別の人間になるんだ。まあ、それはその時のお楽しみということで。

この学校について説明しようか。僕が通ってるのは私立時空魔術高等学院。僕が在籍してるのは、時^{とき}魔^ま術^{じゆつ}科3年A組なんだけど、他にも時魔術特殊能力科とか、治癒魔術科とか、色々あるんだ。僕の妹の寿巳玲は、回復魔術が得意だからということで治癒魔術科に入っただ。

ちなみに、治癒魔術科を卒業した先輩のほとんどが、魔術を使った診察をするお医者さんや看護婦さんになってるんだ。

今や、世の中は魔術で溢れかえってるしね。美容魔術に医療魔術……、様々なところで魔術が浸透してるよ。まあ、義務教育に魔術学が組み込まれた時点で、もう変わっちゃったんだあって、僕は思ったけどね。

さて。なんか、自己紹介から世間話に話が脱線してきてるような気が……。

まあ、こんなもんでいいだろ。どうせただの長い独り言だしな。

洗面所を出て自室に入ると、迷わずノートパソコンの画面を立ち上げる。

「さあて。今頃、僕の相方は戦いから帰ってきたってところか」
メールの受信箱を見ながら呟いた。

第2話

白い鳩が飛んできた。一通の手紙を携えて飛んできた鳩は、開かれた窓を通過し、僕の目の前にある円形のテーブルの上に載った。恐る恐る手紙を開く。と

「やあ、君。

先週、君の学校を視察に来た、ゾーイよ。

あたし、昨日から貴方の妹さんを探してるのだけど……、知らないかしら？

まあ、またお手紙よこすわ。

じゃあね、カリスマ時空切取り師マトくん。

貴方の好敵手　ゾーイより」

あー、あの人か。懐かしい……。

よし。鏡の前に立って、他己紹介でもするか。

「……こほん。えーと。ゾーイという人はですねえ、僕の敵のうちの一人です。今夜僕がお会いする人だったりします、はい。で、えーと、実は、学院長の話によれば、ゾーイという人は、僕の叔母にあたる人だそうです。でも、僕は、ゾーイ叔母さんを親戚として学院長に紹介してもらう前に、既に敵として会ってしまったので、今更親しみとか無いですし、困るだけなのですがね（変な汗が出てきたので、ハンカチで拭かせてもらいますね。あ、ちなみに、別に僕はいつの年かに活躍したアスリートではありませんよ。極々フツフツ……の、時空魔術高校の3年生に過ぎず、夜の時間帯を除けば、ほんっとフツーですよ僕は。はい。ホントの本当にフツー）。

……こほん。えーっと……。どこまでお話しましたかね（鏡の前で苦笑いしてんじゃないよ僕……）。

つまり、ゾーイ叔母さんは、僕の好敵手ってことです（何かちが……っ？）。とゆーわけで、ゾーイ叔母さん、きつと今夜いらっしやると思うので、お楽しみに」

ふう。心の中で色々呟いたの含めると、かなりgdgdな他己紹介だけど、まあ、いいか。

他己紹介から次のことへ脳を切り替える次いでに、部屋の壁の前に置かれた、かなり年季の入ってそうな置き時計（あ。歌わなくていいですよ）で時間の確認をする。

「もうすぐ17時かぁ……。そろそろ、今夜の準備しなきゃ」
窓の外は、もう真っ暗だった。

第3話（1）

見える。轟くように連立するビル群の向こうに、小さな人影が見える。

午後5時59分30秒

頭の中から、足の裏から、エネルギーが僕の心に向かい流れる。力が満ちる。

午後5時59分32秒

見える影は徐々に大きくなる。

影は、ビルの窓から零れる蛍光灯の光に照らされる。

午後5時59分42秒

そこに立つのは 顔見知りのあの人だった。

カウントしよう。

21、20、19、18、17、16、15

暗闇に響く靴音が、徐々に大きくなる。

5、

深呼吸をする。

3、2

手に持っていた懐中時計を月に差しだし、僕は叫ぶ。

「聖なる夜に現れるは時魔術師の使い魔。ただ流れる時とただそこにある空間に咲かせるは花魔術。科学と魔術が混ざり合うこの混沌とした世に現れるは、大魔術師の生まれ変わり 我は時空切取り師マト！」

懐中時計が光ると同時、全身を螺旋状に魔術文字が走る。

光が消えると、僕はもう制服姿ではなかった。

満月に映える黒のシルクハット、タキシード。上に太く伸びる杖の

先端には先ほどの懐中時計が付き、僕の手には

「現れたわね、カリスマ時空切取り師マト」

変身したばかりの僕に話しかけるのは勿論、僕の敵だ。

「また会いましたね」自分の顔が引きつるのがわかる。
一歩ずつ、

「お手紙、読ませていただきましたよ、叔母さん」

また一歩ずつ、

「いやあ、相変わらず嫌な人だ。どうしてそんなに僕を好いてくれるのかなあ？」

近寄り、同時に嘲笑をし、声量を上げる。

「ほんとに不思議な人だ。てか、不思議ちゃんなんじゃないのぉ？」

盛大に嫌味を込めて言ったつもりだった。けれど、彼女は表情を崩さないまま、ただ微笑み続ける。

「ふふ……。貴方、やっぱりお母さんに似てるわねえ。そういう、挑発的な言い方が……」

叔母さんが口を閉じた時、僕は立ち止まり、杖の先で、叔母さんの顎をくいと天に向ける。

「今日こそは、帰してもらおうか」

僕と叔母さんとの間の距離、5センチメートル。

「やなこった。帰さねえよ、あたしは。あたしはねえ」

僕を殺しに来た、とか言いませんよね、まさかね」

杖を持つ手に力が入る。

「殺しはしないが、あんたの能力をもらいに来た」

ず
い
っ
、

「あげませんよ、絶対に。永久に」

ずい、ずいつ、

「今宵、必ず持ち帰ると、ボスに言ってしまった以上、……もらう」

ずい、ずい、ずい、ずい、ずい――

「つと、叔母さんの喉元を杖の先で押す。」

「ふうん。じゃあさ、今夜……、僕に勝ったらあげてやってもいい」

よ。
けどまあ、負けるだろうね」

すつと杖を放す。

「戦う前に言うな、ガキが」

悪態をつくや否や、叔母さんは跳躍する。

月夜に舞うは男女の姿と誰のとも知れぬ乱れ血と憎しみの気。
今宵、カリスマ切取り師マトは月夜の空を駆ける！

第3話(2)

駆ける。

黒いマントを纏う彼女を追いかけながら。

ビルの屋上を駆ける。病院の屋上の地面を蹴る。天高く跳躍。

「待ちやがれ」

上がる息を抑え、彼女の背中に向かって叫ぶ。

声に振り向いたかと思ったら　こちらに迫り来る。

距離にして数十メートル。僕はステッキを前に突き出す。一

回転。ステッキは魔術文字の羅列に巻かれる　その刹那、閃光が

東京の闇夜を貫く。

手元に戻ったのは白兔の使い魔。

「そんなもの使ったって、勝てるわけがない！あんたの能力はあたしのもんだね」

構わず、白兔の背を撫でる。すると、それまでは一羽しかいなかったはずの白兔が10羽に増え、マトの背後で待機している。

「叔母さん、それは僕に勝ってから言ってくれないかな」

叔母さんに向かって、両手で四角を作り、少しずつ大きくしていく。

その図で、叔母さんの姿を捉える。

「叔母さん、貴方には色々聞きたいことがありますてね……。だから、生かしてあげるけど」

更に四角を大きくし、叔母さんと彼女の居る空間の一部を捉える。

「キ・リ・ト・リ！」

その瞬間、そこにあったはずの一欠片の空間、一人の女性は消えた。

あるのは、残りの数多ある無色透明のキューブの集合体で出来たこの空間だけ。

切り取られた空間を追うべく、僕は自分の体とそれがある一部の空

間だけを切取ると、東京から消えた。

第3話(2)(後書き)

かなり駄文ですね。描写力ゼロですね。まだまだ未熟な私ですが、完結するまでは書き続けつつ、実力を徐々に上げていけたらと思っていますので、どうか今後の【時空切取り師マト】を宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7605y/>

時空切取り師マト

2011年11月27日12時51分発行